

分裂病と診断された女性のロールシャッハ・テスト

山下京子

Rorschach Test of a Female Patient diagnosed as Schizophrenia

Kyoko YAMASHITA

Abstract

The Rorschach Test was performed twice on a female patient who was diagnosed to be schizophrenia, and its results were presented. By the analysis of a Comprehensive System, the SCZI (Schizophrenia Index) indicated negative at the two times analyses. However, according to the overall interpretation of the test results, it was shown that the subject had trouble in thinking and emotion, and that her pathological level was more serious than the level suggested by the SCZI.

1. はじめに

ロールシャッハ・テストは、精神科で最も良く使われる心理検査のひとつであるが、ロールシャッハ・テストから推察される被験者の病理水準は、どの程度有効であろうか。包括的システムにおける精神分裂病指標（SCZI）は、精神分裂病を鑑別する指標ではないが、被験者の病理水準を反映した指標と言える。今回提出する事例は、精神分裂病と診断されている女性に対して、2回のロールシャッハ・テストを実施したものであり、2回ともSCZIは陰性であった。2回のテスト結果をもとに、被験者の病理水準の比較・検討を行いたい。

2. 事例の概要

被験者：女性，30歳代，未婚。

乳幼児期，特に問題もなく，小・中・高校を地元で過ごす。県外の4年制大学を卒業後，地元に戻り，就職する（X年）。仕事振りは熱心で，夜遅くまで働き，次第に仕事が増え，体調を崩す。さらに，食思不振に陥り，体重が減少。仕事に対する意欲が低下し，仕事も辞め，

昼夜逆転の生活を送るようになる。X+1年、親の勧めで、内科を受診し、そこで心療内科受診を勧められる。しばらく外来通院した後、入院する。入院時の診断は、『摂食障害』であり、その後、診断は、『境界型人格障害』、『分裂病の疑い』へと変わった。入院中は、医師と心理士が治療に携わっていた。X+2年、入院後約3ヶ月経過したところで、外泊訓練が始まるが、外泊時に家出をして、県外へ行く。約1ヶ月間家出の状態が続いたが、滞在先から連絡があり、実家に連れ戻される。このころ、地元のY精神科病院初診。『精神分裂病』の診断を受ける。その後しばらく実家にいたが、2ヶ月後に再び家を出て県外へ。6ヶ月以上立ってから、突然、本人が実家に戻って来る。しかし、4ヶ月後のX+3年、またも家を出て、遠く離れた県外で生活を始める。人目を避けて、暗くなってから行動する、急に笑い出す、独り言を言うなど、奇妙な行動が目立つようになり、精神科入院。6ヶ月の入院後、地元のY病院へ転院(X+4年)。その後、Y病院で、入退院を繰り返している。

Y病院での入院歴は、1回目(X+4年)約8ヶ月、2回目(X+5年)約1ヶ月、3回目(X+6年～X+7年)約6ヶ月、4回目(X+8年～X+9年)約6ヶ月、5回目(X+9年～X+10年)約6ヶ月、6回目(X+11年)約3ヶ月である。Y病院での診断は5回目入院時の『分裂病型人格障害』を除くと、『分裂病』である。

6回目の入院時の記録によれば、5回目の退院後は、一人暮らしをし、しばらくは定期的に外来通院し、訪問看護も実施していたが、次第に通院が遠のき、訪問しても留守が多くなる。徘徊し、落ち着かず、自殺をほのめかし、両親に対してきわめて攻撃的になり、両親が本人を連れて受診している。

6回目の入院時の診察では、きわめて疲労困憊した様子で、「ストーカーが家の周りをうろつく、家の中にも入ってくる。服にも傷をつけたり、ボタンを付けなおしている。」「警察にも電話したが取り合ってくれない。」「近隣からも悪口を言われている。」など、被害妄想が出現し、ため息をつきながら、途切れ途切れに話し、思考も乱れていた。病識がなく、一人暮らしで不測の事態を招きかねず、医療保護入院となった。

家族歴に特記すべきことはなく、経済的に恵まれた生育環境であり、家出を繰り返す彼女に対して、かなり高額の金銭的援助を行っている。

第1回目のロールシャッハ・テストは、5回目入院時に実施し、第2回目のテストは、約1年6ヶ月後の6回目入院時に実施した。

3. 第1回目のロールシャッハ・テスト結果

第1回目のロールシャッハ・テストは、5回目入院後、約5ヶ月立った時に(退院の約1ヶ

月前)実施している。検査は包括的システム (Exner, 1986) の手続きにしたがって行い、その結果を表1に示した。表1をもとに、結果を整理・分析し、表2に構造一覧表を示した。

4. 第1回目のロールシャッハ・テストの解釈

鍵変数では、 $D < Adj D$ 、体験型外向型、 $p > a+1$ に該当する。したがって、解釈戦略は、統制、状況ストレス、感情、自己知覚、対人知覚、情報処理過程、媒介過程、思考の順になる。

1) 統制力とストレス耐性

$Adj D = +3$ 、 $CDI = 3$ であり、ほとんどの人よりも、被験者の統制力とストレス耐性は強い。 $EA = 14.0$ と平均よりもかなり高く、利用可能な資質が多くあることが示されている。 $EB = 2 : 12.0$ で、外向型であり、 $L = 0.60$ でハイラムダスタイルはない。 $es = 7$ 、 $Adj es = 6$ は平均域である。 $eb = 4 : 3$ で、 $C' = 3$ が平均より多い。 C' は、感情の抑制を表し、高橋他 (1998) によると、 FC' は $C'F$ と異なり、被験者が抑制した感情に気付いて、「いたいことを意識して押さえている」(Exner, 1991, 1993) 状態であり、そのために焦燥感が生じた状態であるのに対して、 $C'F$ の焦燥感は何に起因しているか気付いていない状態と言える。精神分裂病者群での出現率は、 $C' \geq 2$ が42%、 $C' \geq 3$ が24%である (高橋他, 1998)。被験者の場合、 $FC' = 1$ 、 $C'F = 1$ 、 $C' = 1$ であり、外に出したい感情を過度に抑制しており、そのことに気付いている面と気付いていない面とがあることが示されていると考えられる。

2) 状況関連ストレス

$D = +2$ で、平均より多く、ストレス耐性と統制力は強いといえる。ただし、 $D < Adj D$ でその差は1であり、何らかのストレスにより、通常の思考や行動パターンに穏やかな妨害が生じている。被験者のブレンドは5個あり、そのうち2個がmによって生じており、現在のストレスが通常よりも心理的複雑さを増大させていると考えられる。色彩濃淡ブレンドは、 $C.C' 1$ 個であり、感情の混乱が示されている。

3) 感情の特徴

$DEPI = 5$ であり、被験者の人格構造はしばしば激しい抑うつや感情的崩壊を経験する傾向があるということが示されている。 $CDI = 3$ で平均域。 $EB = 2 : 12.0$ で、体験型は外向型であり、対処行動において、感情を思考に混入させる傾向が強い。外向型は、我が国のデータでは、健常成人の15%、精神分裂病者の41%にみられ (高橋他, 1998)、一方、Exner (1991, 1993) によ

表1 第1回目のロールシャッハ・テスト結果

図版	反 応	質 問 段 階	スコアリング
I	1 こうもりか 2 羽のある動物。 3 一対になっている、子どもか何かが一対になっている。 4 人と人が手を合わせている。	羽。 胴体。昆虫と羽がくっついている。 顔、髪、背中、足。子ども、小さい、3頭身だから。 頭。赤いから赤い帽子。手。炎か何かを踏み潰している儀式。	Ddo99 F-A Wo1 Fo A 1.0 DV Do2 Fo 2H W+1 Ma.CFo 2H.Cg.Fi 4.5 AG PHR
III	5 人と人が向き合って井戸か水場、鉢か何かに手を突っ込んでいる。 6 これはたいまつか何かと思います。 7 これは女性ですね。 8 チョウか何かの一種かなあ。不気味ですね。 9 これも虫が羽を広げている。触覚が見える。足が見える。 10 黒い虫。 11 これは楽器。弦楽器、バイオリン。形が地震か何かで崩れちゃった感じ。アメリカかどつかのいい楽器じゃないかな。アメリカに有名な音楽院。そういうのが、頭をよぎっています。 12 子どもが二人の子どもが一対になって、頭がボニーテールになっていて、何でここでつながっているのか不思議。子ども以外には見えない。女の人ですね。 13 色的には花の色。緑とピンクとオレンジと。逆に、それがべたつとなっちゃった感じ。 14 この緑はアロエの色っていう感じ。 15 さっきと同じ色使いで何か画家が描いたのかなあ。描いているのかもしれない。 16 これをのけやうとサボテンのイメージ。亜熱帯の砂漠の中に咲いているようなサボテン。	D-1 Mpo 2H, Hh, Cg P 3.0 PER GHR Dv2 CFo 2 Fi Wo1 Fu A 2.0 MOR Ddo99 F-A DV Wo1 FMpo A 1.0 Wo1 FC. FMpu A 1.0 Wo1 Fu Sc 2.5 MOR, DR	
III	13 色的には花の色。緑とピンクとオレンジと。逆に、それがべたつとなっちゃった感じ。 14 この緑はアロエの色っていう感じ。 15 さっきと同じ色使いで何か画家が描いたのかなあ。描いているのかもしれない。 16 これをのけやうとサボテンのイメージ。亜熱帯の砂漠の中に咲いているようなサボテン。	両方に羽が生えていて、触覚がある。 えびだったら胴体、足、触覚。 休めている。 さあ飛び立つという感じ。 風に吹かれ形が変わってしまった。安物じゃない。	W+1 Fo 2H P 2.5 FAB, DV PHR
IX	14 この緑はアロエの色っていう感じ。 15 さっきと同じ色使いで何か画家が描いたのかなあ。描いているのかもしれない。 16 これをのけやうとサボテンのイメージ。亜熱帯の砂漠の中に咲いているようなサボテン。	顔、手、腰。足がつながっている、双子。 上からつぶした。 季節的にみどりの健康的ドリンク、サボテン。 タツチ。 緑と花。	Wv1 C Bt MOR Dv5 C Fd Wv1 C Fo Art Do2 CFo Bt Wv1 C.C' Sc
X	17 いろんなものがゴチャゴチャしている。遊園地にある乗り物のパステルカラーのイメージを思い出しました。黒いのは、わかんない。モーター室、裏方。 18 緑の鳥か何か。 19 クワガタ。甲殻類。 20 そうなると、動物園。ゴチャゴチャしているのが寄せ集め。 21 青いのは海で言えば海草。	強いペイント。赤、青、黄が使っている。黒い乗り物はあまりないから。 1羽。象徴的に。 子どもが喜びそう。都市で売っている。 鳥がいる、虫がいる。 タイニックスを見て、夏は海。べたつと浮いているのかなあ。	Do1 FC uA Do7 Fu A DR Wv1 Fu A Dv1 CF.mpu Bt A LOG
	22 森にあるものは、黄色は鳥、暑い所にいるインコとか。 23 この感じは炎。 24 黄色いのは鳥の色って感じ、黒いのも虫に見えちゃいますね。	Ddo99 CFo 2A Dv13 CF.mp- 2Fi Do11 CF-A	

表2 第1回目のロールシャッハ・テスト構造一覧表

STRUCTURAL SUMMARY					
LOCATION FEATURES	DETERMINANTS		CONTENTS	S-CONSTELLATION	
	BLENDS	SINGLE		NO. .FV+VF+V+FD>2	
Zf = 8	M.CF	M =1	H = 4,0	YES. . Col-Shd Bl>0	
ZSum =17.5	FC'.FM	FM =1	(H) = 0,0	YES. . Ego<.31,>.44	
ZEst =24.0	C.C'	m =0	Hd = 0,0	NO. . MOR>3	
	CF.m	FC =1	(Hd) = 0,0	YES. . Zd>+ -3.5	
W=11	CF.m	CF =4	Hx = 0,0	NO. . es>EA	
(Wv=4)		C =2	A =11,0	YES. . CF+C>FC	
D =10		Cn =0	(A) = 0,0	YES. . X+%< .70	
Dd= 3		FC' =0	Ad = 0,0	NO. . S>3	
S = 0		CF =1	(Ad) = 0,0	YES. . P<3 or>8	
		C' =0	An = 0,0	NO. . Pure H<2	
DQ		FT =0	Art = 1,0	NO. . R<17	
..... (FQ-)		TF =0	Ay = 0,0	6.TOTAL	
+ = 3 (0)		T =0	Bl = 0,0		
o =13 (3)		FV =0	Bt = 3,0	SPECIAL SCORINGS	
v/+ = 0 (0)		VF =0	Cg = 0,2	Lv1	Lv2
v = 8 (1)		V =0	Cl = 0,0	DV = 3x1	0x2
		FY =0	Ex = 0,0	INC = 0x2	0x4
FORM QUALITY		YF =0	Fd = 1,0	DR = 2x3	0x6
		Y =0	Fi = 2,1	FAB = 1x4	0x7
		Fr =0	Ge = 0,0	ALOG = 1x5	
		rF =0	Hh = 0,1	CON = 0x7	
		FD =0	Ls = 0,0	Raw Sum6 = 7	
	FQx FQf MQual SQx	F =9	Na = 0,0	Wgtd Sum6= 18	
+ = 0 0 0 0			Sc = 2,0		
o = 10 3 2 0			Sx = 0,0	AB = 0	CP = 0
u = 7 4 0 0			Xy = 0,0	AG = 1	MOR = 3
- = 4 2 0 0			Id = 0,0	CFB = 0	PER = 1
none= 3 - 0 0		(2) = 7		COP= 0	PSV = 0
RATIOS, PERCENTAGES, AND DERIVATIONS					
R=24	L= 0.60		FC:CF+C = 1:10	COP=0	AG = 1
			Pure C = 3	Food =1	
EB=2:12.0	EA=14.0	EBPer= 6.0	SumC': WSumC= 3:12.0	Isolate/R = 0.13	
eb=4:3	es= 7	D= +2	Afr =1.00	H: (H) Hd (Hd) = 4:0	
	Adj es= 6	Adj D= +3	S = 0	(HHd): (AAd) = 0:0	
			Blends: R = 5:24	H+A: Hd+Ad = 15:0	
FM=2 : C'=3	T=0		CP = 0		
m =2 : V=0	Y=0				
		P =2	Zf =8	3r+ (2)/R =0.29	
a:p =1:5	Sum6 = 7	X+% =0.42	Zd =-6.5	Fr+rF = 0	
Ma:Mp =1:1	Lv2 = 0	F+% =0.33	W: D: Dd =11:10:3	FD = 0	
2AB+Art+Ay=1	WSum6 =18	X-% =0.17	W:M =11:2	An+Xy =0	
M- =0	Mnone = 0	S-% =0.00	DQ+=3	MOR =3	
		Xu% =0.29	DQv =8		
SCZI=2	DEPI=5*	CDI=3	S-CON=6	HVI=No	OBS=No

るデータでは、健常成人44%、精神分裂病者11%と、異なっている。被験者の体験型は、EBPer=6.0で顕著に固定化されている。これを、高橋他(1998)は、超外向型と呼んでおり、高橋他(1998)による我が国のデータでは、超外向型は、健常成人9%、精神分裂病者29%であり、Exner(1991,1993)によるデータでは、健常成人12%、精神分裂病者6%である。超外向型は、適応に問題があり、熟考して行動するよりも、感情に支配されて衝動的になったり、その場あたりの行動をとりやすいといわれている(高橋他, 1998)。

ebの右辺では、 $C'=3$ が特徴的であり、この点に付いては、すでに、1) 統制力とストレス耐性のところで取り上げたように、被験者は感情を抑制していることが示されている。ただし、 $SumC':WSumC=3:12.0$ に示されるように、被験者は感情をあえて出さないと言うわけではない。むしろ、 $Afr=1.00$ と非常に高率であり、被験者は感情刺激に過剰に反応することが示されている。さらに、 $FC:CF+C=1:10$ で、うち純粋Cが3個あり、被験者は感情調節に重大な問題を持っていると考えられる。おそらく被験者は、過度に感情的で、衝動的であると見られがちである。被験者の体験型が超外向型であることを考えると、被験者の判断は非常に歪んでしまう可能性が高くなり、適応上、かなりの困難を伴いやすいと想像される。

純粋C反応は、反応番号13,14(Ⅷ図版)、17(X図版)の3個であり、反応内容は、『色的には花の色』(13)、『緑はアロエの色』(14)、『遊園地にある乗り物のパステルカラーのイメージ』(17)であった。反応番号13は、『逆さにべたとなっちゃった感じ』とも述べられているので、CFの方が適切かもしれない。いずれにしても、どの反応も非常に未熟な反応内容であり、被験者の感情調節の緩さをうかがわせる。

ブレンドは5個とやや多いが、反応の21%にあたり、これは外向型の平均域内であり、被験者の心理的複雑さは、外向型の人と同程度である。色彩濃淡反応は、1個あり、しばしば感情によって混乱することが示されている。

4) 自己知覚

自己中心性指標は、0.29であり、被験者の自己価値の評価は否定的な傾向にある。ただし、高橋他(1998)による我が国のデータでは、自己中心性指標の平均は、Exner(1991,1993)の0.39より低い0.30であり、我が国のデータからすれば、被験者の自己中心性指標は、平均域に入る。FD、V反応ともになく、被験者は通常の場合より、自分に付いての気付きが少ない。 $H:(H)+Hd+(Hd)=4:0$ で、全て人間全体反応である。 $MOR=3$ と多く、被験者の自己イメージには否定的な特徴が顕著である。MORの反応は、反応番号7(Ⅳ図版)、11(Ⅵ図版)、13(Ⅷ図版)で、反応内容は、『チョウか何かの一種かなあ。不気味ですね。』(7)、『弦楽器、形が地震か何かで崩れちゃった感じ。』(11)、『花の色。緑とピンクとオレンジと。逆さに、それがべたっと

なっちゃった感じ。』(13)であった。崩れてしまった自己イメージが反映されているような印象を受ける。

マイナス反応およびu反応に投影されている自己イメージとしては、反応番号11(VI図版), 20(X図版)をあげることができるだろう。11についてはMOR反応のところですでに取り上げた。20の反応内容は、『動物園。ゴチャゴチャしているのが寄せ集め。』である。M反応を見ると、反応番号4(II図版), 5(III図版)に示されるように、その反応内容は、『炎か何かを踏み潰している儀式。』(4), 『手を合わせて触っている儀式。』(5)であり、儀式であることが特徴的である。また、FM反応は、反応番号9,10(V図版)に見られ、『(羽を)休めている』(9), 『さあ飛び立つという感じ』(10)のように、これからの状態にいるような感じを受ける。

5) 対人知覚

$a:p=1:5$ で $a < p$ であり、被験者は、対人関係で受身的な役割を取りやすいと考えられる。食物反応は1個あり、反応番号14の『みどりの健康的ドリンク』で、Fdとしたが、Btとした方が適切かも知れず、通常ではない依存傾向が存在するかどうかははっきりとは言えない。 $H+(H)+Hd+(Hd)=4$ で、他者に対して、通常の間心を持っていると考えられる。 $COP=0$, $AG=1$ で、被験者は他者との間に肯定的な相互作用を知覚しない人である。人間反応の内容は、『子ども』(反応番号3,12), 『人と人』(4), 『人と人。女性』(5)で、具体的なイメージはなく、関わり方は、儀式と言う形式的なものとなっている。 $GHR:PHR=2:2$ であり、特に対人関係のイメージが悪いと言う証拠はない。

6) 情報処理過程

$L=0.60$ で、平均域にある。OBS, HVIは陰性であった。 $Zf=8$, $W:D:Dd=11:10:3$, $W:M=11:2$ で、 Zf がやや低く、Mに対するWの数が多い点で、特徴的である。また、 $DQ+=3$, $DQv=8$ と、 DQv が非常に多く、さらに $Zd=-6.5$ とかなり低く、アンダーインコーポレーティブ(刺激摂取不足)スタイルである。これらのことから、被験者は、情報入力段階から、すでに問題を持っていると考えられ、刺激を漠然と知覚し、不正確で未熟な水準の情報処理を行っているとは仮定される。ただし、 $W:M$ に示されるように、被験者は、情報処理に非常に努力しようとしており、能力以上の高い要求水準を持っていると考えられ、このことは、被験者の否定的な自己イメージと相反するものである。

7) 認知的媒介過程

$P=2$ で、反応番号5(III図版), 12(VII図版)のみであり、平均よりもかなり低い。被験者は、

単純で正確に定義付けられた場面でも、独創的で非慣習的な反応をしがちであることが示唆される。また、 $X+$ も42%とかなり低く、被験者は、刺激の慣習的翻訳をあまりしないように方向付けられていると考えられる。ただし、 Xu が29%で、 FA は71%となり、被験者の非慣習的な翻訳は、個性を強く強調していることと表れと考えられる。高橋他（1998）によれば、 $Xu \geq 25\%$ は、健常成人の24%にあたり、精神分裂病者群では、 $X-$ が高いのに Xu が9%と低くなっている。被験者の場合、 $X-$ は17%で平均よりも高く、 Xu も高いという点で、特徴的である。

マイナス反応は、反応番号1(I図版)、8(IV図版)、23,24(X図版)の4個であり、それぞれの反応内容は、『コウモリ』(1)、『虫』(8)、『炎』(23)、『虫』(24)であった。特に重要であるとされている第1反応では、『コウモリ』を見ながらも、 Dd 領域のために、マイナス反応となっており、歪曲の程度としては、重大なものではない。他のマイナス反応も、同様である。

8) 思考

体験型は、すでに、3)感情の特徴で検討したように、超外向型であった。被験者の思考は、感情によって影響を受けることがほとんどであり、そのために複雑な思考パターンが生じうると考えられる。 eb の左辺は4で平均域であるが、 $m=2$ であり、状況ストレスによって周遊的な精神活動が増大していると考えられる。 $a:p=1:5$ で、被験者の思考や価値観は非常に固定的で、非柔軟的なものであることが示されている。また、 $MOR=3$ で、被験者の思考は、悲観的な構えにより特徴付けられている。

特殊スコアを見ると、 $Raw\ Sum6=7$ 、 $Wgtd\ Sum6=18$ で、 $SCZI$ における $Raw\ Sum\ of\ 6\ Spec.\ Scores > 6\ or\ Weighted\ Sum\ of\ 6\ Sp.\ Sc. > 17$ のいずれにも該当している。高橋他（1998）によると、健常成人の $Sum6\ Sp.Sc. \geq 2$ の者は19%で、精神分裂病者群では75%である。また、健常成人の $W\ Sum6 \geq 3$ の出現率は38%、精神分裂病者群では80%で、 $W\ Sum6 \geq 10$ の出現率は、健常成人で2%、精神分裂病者群では60%である。これらのことから、被験者の場合、思考に重大な問題があると仮定される。特殊スコアのついた反応としては、 DV は、反応番号2、8、12の3個、 DR は、反応番号11、19の2個、 FAB が反応番号12、 $ALOG$ が反応番号21であった。 M 反応は2個あり、どちらの反応も問題はない。

9) 総合的所見

被験者は、感情の問題を抱えていると考えられる。体験型が超外向型であるために、被験者の思考は感情によって影響を強く受け、感情調節の失敗は、思考にかなり大きな打撃を与えると思像される。また、被験者の認知的側面、すなわち、情報処理過程、認知的媒介過程、思考

の三側面は、それぞれの段階で問題を持っていることが明らかにされた。SCZIが陰性であるように、被験者の思考障害が精神分裂病的であるとは断定できないものの、分裂病の疑いは否定できない。被験者が資質的に恵まれている点や、FA%の高さ、良好なM反応は、良い情報であるが、Pの少なさやDQvの多さは、被験者の病理水準が決して軽くはないことを示唆している。

5. 第2回目のロールシャッハ・テスト結果

第2回目のロールシャッハ・テストは、6回目の入院後、約1ヶ月立った時に実施している。第1回目のテスト実施から、約1年6ヶ月経過していた。検査は、1回目と同様、包括的システム(Exner, 1986)の手続きにしたがって行い、その結果を表3に示した。表3をもとに、結果を整理・分析し、表4に構造一覧表を示した。

6. 第2回目のロールシャッハ・テストの解釈

鍵変数では、 $D < Adj D$ 、体験型外向型、 $p > a + 1$ に該当し、第1回目と同様であった。したがって、解釈戦略も、第1回目と同じで、統制、状況ストレス、感情、自己知覚、対人知覚、情報処理過程、媒介過程、思考の順になる。

1) 統制力とストレス耐性

$Adj D = +2$ 、 $CDI = 3$ であり、ほとんどの人よりも、被験者の統制力とストレス耐性は強い。 $EA = 15.5$ と平均よりもかなり高く、利用可能な資質も多くある。 $EB = 4 : 11.5$ で、外向型であり、 $L = 0.20$ と低くなっている。 $es = 13$ 、 $Adj es = 8$ で、問題ない。 $eb = 5 : 8$ で右辺の方が大きく、被験者は何らかの苦痛を経験していると仮定される。また、 $C' = 3$ が平均より大きく、外に出したい感情を過度に内に押し込めていることが示されている。

2) 状況関連ストレス

$D = 0$ で、平均域にあるが、 $D < Adj D$ で、その差は2ある。被験者の経験しているストレスは、かなり深刻で、被験者のストレス耐性は、通常よりも低くなっていると考えられる。被験者のブレンドは10個あり、 m 、 Y によって生じているブレンド数は5個であり、現在のストレス状況が、被験者の心理的複雑さを増加させていることが示される。色彩濃淡ブレンドは、 C 、 Y が2個、 C 、 C' 、 CF 、 YF 、 CF 、 $C'F$ 、 FM の5個あり、被験者がしばしば感情的に混乱し、現在のストレ

表3 第2回目のローレンシャツハ・テスト結果

図版	反 応	質 問 段 階	スコアリング
I	1 妖精が二人。 2 昆虫が2匹、1対。描いた人が、どのくらいのレベルかな、今の試験で振り分けるのか。カプトムシ系か。 3 小人が二人。手をあわせて、呪術的。 4 赤と黒の世界。 5 夕方。濃淡の世界。	白黒。羽を持っていて、2人でつがいになって、心を寄せあって、手を合わせている。対称だから。カプトムシの触覚。羽があって、手があって、昆虫1匹。 赤と黒の世界。 赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	D+2 FC_Mpoo 2(H), Hx 6.0 W01 Fo A 1.0 INC DR W+1 Mp.CFo 2(H), F1.4.5 W01 CC' Art W01 C.Y Na W+1 Mp.ma.CFo 2(H), Hx.F1, Art P 5.5 COP, DV GHR W01 YF-(A) DR W01 FMp.FY0 A 1.0 W01 Fu Sc 2.5 DR
II	3 赤と黒の世界。 4 夕方。濃淡の世界。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
III	6 ちよつと昔のインディエーションズの映画。2人1対の何が炎があつて、ハートかな。2人の心が通じている。これは女性でしょうね。2人が通じていると言っ感じ。つながりを持ってゐるって感じ。 7 古代の映画、洞窟の中に入っている出て出た昆虫、植物、動物、船のような。1対にならなくていい。パラノクス関係にも見えています。 8 昆虫で、触手。羽を広げていて。濃淡の世界で。さっきより洗練された動物という感じ。こつちの方がさっきより感じが良い。 9 滋養器の元祖。持つ人によって、10万から300万。関係ない人にとつては、30万くらいが欲しいと思つている。後、お部屋と環境があればはやっていく。こつちがヘッド。ベースがついていて、こつち風。あんまり見ても。	白黒。羽を持っていて、2人でつがいになって、心を寄せあって、手を合わせている。対称だから。カプトムシの触覚。羽があって、手があって、昆虫1匹。 赤と黒の世界。 赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
IV	7 古代の映画、洞窟の中に入っている出て出た昆虫、植物、動物、船のような。1対にならなくていい。パラノクス関係にも見えています。 8 昆虫で、触手。羽を広げていて。濃淡の世界で。さっきより洗練された動物という感じ。こつちの方がさっきより感じが良い。 9 滋養器の元祖。持つ人によって、10万から300万。関係ない人にとつては、30万くらいが欲しいと思つている。後、お部屋と環境があればはやっていく。こつちがヘッド。ベースがついていて、こつち風。あんまり見ても。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
V	8 昆虫で、触手。羽を広げていて。濃淡の世界で。さっきより洗練された動物という感じ。こつちの方がさっきより感じが良い。 9 滋養器の元祖。持つ人によって、10万から300万。関係ない人にとつては、30万くらいが欲しいと思つている。後、お部屋と環境があればはやっていく。こつちがヘッド。ベースがついていて、こつち風。あんまり見ても。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
VI	9 滋養器の元祖。持つ人によって、10万から300万。関係ない人にとつては、30万くらいが欲しいと思つている。後、お部屋と環境があればはやっていく。こつちがヘッド。ベースがついていて、こつち風。あんまり見ても。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
VII	10 これは虫に見えちゃったりするんですけど。少しこつち暗めですよ。叙述的。女の子のポニーテール。二人の心が通じて合つて、双子で以心伝心。女の子としか見えない。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
VIII	12 私の好きなバスタートの色で、どう見ればいい。動物の手と足とシツポ。2対。あとは、何かを求めて、頂上に向かって、歩いているのか。あとは、岩なのか、草なのか、良くわからない。こつちの方で見てもうんですけど。 13 これは海草の色ですね、グリーンで。 14 色が何かちよつと炎っぽくて。 15 グリーンとピンク、海草の色でしょうか。サンゴ系、コーラル系と海草の色。 16 海の中。ほんやりしている。龍宮城へのステップ。広高に手紙を書いて、大野浦は龍宮城の入り口みたいな感じがあるので。あまり、汚いものには見えない。 17 グリーン、海草。背に、昆虫に、タツノオトシゴ。ピンクの海岸。海が出てきて、これはわからない。動物的なのかな。昆虫の進化したもの。これも海の中の生物。今年は辰年なのでタツノオトシゴ。タツノオトシゴを立て、いいことあると良いなと思う。対称物でした、全て。赤いのは、ちよつとした岩肌。 18 中心にあるのは、人の心。わかんないや。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
IX	13 これは海草の色ですね、グリーンで。 14 色が何かちよつと炎っぽくて。 15 グリーンとピンク、海草の色でしょうか。サンゴ系、コーラル系と海草の色。 16 海の中。ほんやりしている。龍宮城へのステップ。広高に手紙を書いて、大野浦は龍宮城の入り口みたいな感じがあるので。あまり、汚いものには見えない。 17 グリーン、海草。背に、昆虫に、タツノオトシゴ。ピンクの海岸。海が出てきて、これはわからない。動物的なのかな。昆虫の進化したもの。これも海の中の生物。今年は辰年なのでタツノオトシゴ。タツノオトシゴを立て、いいことあると良いなと思う。対称物でした、全て。赤いのは、ちよつとした岩肌。 18 中心にあるのは、人の心。わかんないや。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
X	17 グリーン、海草。背に、昆虫に、タツノオトシゴ。ピンクの海岸。海が出てきて、これはわからない。動物的なのかな。昆虫の進化したもの。これも海の中の生物。今年は辰年なのでタツノオトシゴ。タツノオトシゴを立て、いいことあると良いなと思う。対称物でした、全て。赤いのは、ちよつとした岩肌。 18 中心にあるのは、人の心。わかんないや。	赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR
		赤い濃淡で。表情、小人の顔と目と口、形態として小人として。全体的に濃いとところ薄いところがある。共同作業。呪術的な作業。古代的な印象。胸、手、足。ハートのリボン。ハートがふたつ。つなぎ目があってリボン。炎、上に向かって、上束している。赤い炎。印象、得体的な知れないもの。濃淡で細かく表現。(洞窟?) 前のつなぎ目から。(パラノクス関係?) 社長、従業員の間、1対になるものがある、人間関係。触覚。羽の形が洗練。触手、羽、足。(濃淡の世界?) 1本通っている。すそ広がり女性型。弦の余ったの。	Ddo23 F-Ad DV W+1 Mpoo 2H,Hx P 2.5 Ddv99 C Bt Dv3 CF.YFo 2F1 Ddv99 nmp.CF- Bt Ddv99 C.Y Na DR

表4 第2回目のロールシャッハ・テスト構造一覧表

STRUCTURAL SUMMARY					
LOCATION	DETERMINANTS		CONTENTS		S-CONSTELLATION
FEATURES	BLENDS	SINGLE			NO. .FV+VF+V+FD>2
Zf =9	FC.M	M =1	H =2, 0	(H) =2, 0	YES. . Col-Shd Bl>0
ZSum =31.5	M.CF	FM =1	Hd =0, 0	(Hd) =0, 0	NO. . Ego<.31, >.44
ZEst =27.5	C.C'	m =0	Hx =0, 3	A =3, 1	NO. . MOR>3
W =10	C.Y	FC =1	(A) =1, 0	(A) =1, 0	YES. . Zd>+-3.5
(Wv=3)	M.m.CF	CF =0	Ad =1, 0	(Ad) =0, 0	NO. . es>EA
D =4	FM.FY	C =1	An =0, 0	Art =1, 1	YES. . CF+C>FC
Dd =4	CF.YF	Cn =0	Ay =0, 0	Bt =2, 0	YES. . X+%<.70
S =0	m.CF	FC' =0	Bl =0, 0	Cg =0, 0	NO. . S>3
	C.Y	C'F =0	Cl =0, 0	CI =0, 0	NO. . P<3 or>8
	CF.C'F.FM	C' =0	Ex =0, 0	Fd =0, 0	NO. . Pure H<2
DQ		FT =0	Ff =0, 0	Fi =1, 2	NO. . R<17
..... (FQ-)		TF =0	Ge =0, 0	Hh =0, 0	4. TOTAL
+ =5 (0)		T =0	Ls =1, 1	Na =2, 0	
o =5 (1)		FV =0	Sc =1, 0	Sx =0, 0	SPECIAL SCORINGS
v/+ =0 (0)		VF =0	Sy =0, 0	Id =1, 0	Lv1 Lv2
v =8 (3)		V =0	CP =0		DV =2x1 0x2
		FY =0	AG =0		INC =2x2 0x4
		YF =1	CFB =0		DR =5x3 0x6
		Y =0	COP =1		FAB =0x4 0x7
		Fr =0	PSV =0		ALOG =0x5
FORM QUALITY		rF =0			CON =0x7
		FD =0			Raw Sum6 = 9
	FQx FQf MQual SQx	F =3			Wgtd Sum6 = 21
+ =0 0 0 0					AB =0 CP =0
o =9 1 4 0					AG =0 MOR =0
u =1 1 0 0					CFB =0 PER =0
- =4 1 0 0					COP =1 PSV =0
none =4 - 0 0		(2) =7			
RATIOS, PERCENTAGES, AND DERIVATIONS					
R=18	L=0.20		FC:CF+C =1:9	COP=1	AG =0
			Pure C =4	Food =0	
EB=4:11.5	EA=15.5	EBPer=2.9	SumC': WSumC =3:11.5	Isolate/R =0.44	
eb=5:8	es =13	D=0	Afr =0.64	H:(H)Hd(Hd) =2:2	
	Adj es =8	Adj D=+2	S =0	(HHd) : (AAd) =2:1	
			Blends:R =10:18	H+A:Hd+Ad =9:1	
FM=3 : C'=3	T=0		CP =0		
m =2 : V=0	Y=5				
		P =3	Zf =9	3r+(2)/R=0.39	
a:p =2:7	Sum6 =9	X+% =0.50	Zd =+4.0	Fr+rF =0	
Ma:Mp =0:4	Lv2 =0	F+% =0.33	W : D : Dd =10:4:4	FD =0	
2AB+Art+Ay=2	WSum6=21	X-% =0.22	W : M =10:4	An+Xy =0	
M- =0	Mnone =0	S-% =0.00	DQ+ =5	MOR =0	
		Xu % =0.06	DQv =8		
SCZI=3	DEPI=3	CDI=3	S-CON=4	HVI=No	OBS=No

ス状況が、被験者の感情的混乱をさらに増大させていると想像できる。

3) 感情の特徴

DEPI=3, CDI=3 で問題はない。EB=4 : 11.5 で、体験型は外向型である。また、EBPer=2.9 で、体験様式は固定化されており、感情によって影響を受けない決定はほぼ起こらないと仮定される。

eb の右辺は、 $C'=3$, $Y=5$ から成り立っている。被験者は苦しんでおり、その苦痛の源は、感情を抑制していることに加えて、現在の状況的ストレスによって、無力感や統制力の欠如が増大していることであろう。Yはおかれた状況により左右される変数であり、精神疾患状態よりも危機的状況にある人に多く見られる (Exner, 1991, 1993) と言われ、高橋他 (1998) によると、健常成人で、 $Y \geq 1$ は39%、そのうち $Y \geq 2$ は10%であるのに対して、精神分裂病者群で、 $Y \geq 1$ は38%、そのうち $Y \geq 2$ は15%で、健常成人とほとんど変わらない。

Afr=0.64 で、感情刺激の取り入れは、平均的である。FC : CF+C=1 : 9 で、うち純粹 C=4 であり、被験者は感情調節に重大な問題を持っていると考えられる。純粹 C 反応は、反応番号 4, 5 (II 図版), 13 (VIII 図版), 16 (IX 図版) でみられ、反応内容は、『赤と黒の世界』(4), 『夕方、濃淡の世界』(5), 『海草の色』(13), 『海の中』(16) であった。最初の2つの反応は、知性化されてはいるが、単純な内容であり、他の2つも、未熟な印象を与える内容となっている。これらのことから、被験者の感情調節は顕著に緩やかで、稚拙な感情表現によって特徴付けられると考えられる。

L=0.20, Blends : R=10 : 18 で、被験者の心理的機能は、かなり複雑なものになっている。2) 状況関連ストレスのところですでに検討したように、被験者の心理的複雑さは、現在の状況に関連して生じている部分が大いと考えられ、したがって、状況の変化によって、被験者の心理的複雑さを低減することもできると考えられる。色彩濃淡反応は、5個あり、そのうちYの存在によるものは3個、C'の存在によるものは2個であった。つまり、被験者の感情的混乱は、状況に関連した出来事の結果であるだけでなく、もともと、感情によってしばしば混乱し、同じ刺激状況に、肯定と否定の両面的感情を体験する人であると仮定される。

4) 自己知覚

自己中心性指標は、0.39 で、平均域にあり、自己への関心の程度は、平均的にあると思われる。H : (H) + Hd + (Hd) = 2 : 2, Hx=3 で、被験者が、自己イメージや自尊心を、現実を無視した過度に知性化した方法で取り扱おうとしていることが示されている。MOR=0 で、否定的な自己イメージはない。

マイナス反応およびu反応は、反応番号7(Ⅳ図版)、9,10(Ⅵ図版)、15(Ⅸ図版)、18(X図版)の5個で、それぞれの内容は、『洞窟の中に入って行って出会った昆虫、植物、動物、蛾のような』(7)、『弦楽器の元祖』(9)、『虫』(10)、『海草』(15)、『人の心』(18)である。そこに投影されている自己イメージとしては、『得体の知れないもの』(7)で、『よくわからない』(18)もので、『虫』に見えたのが質問段階で『亀の頭』に見えたり(10)、『ゆらゆらしている』(15)、はっきりしないイメージである。また、反応を詳しく説明しようとして、かえって、反応から遊離してしまうと言う特徴も見ることができる。

M反応は、反応番号1(Ⅰ図版)、3(Ⅱ図版)、6(Ⅲ図版)、11(Ⅶ図版)の4個であり、全て受動的な反応で、『心を寄せ合って』(1)、『心が通じ合っている』(6,11)のように、理解された思いが強調されている。それはまた、『呪術的』(3,6)でもある。

FM反応は、反応番号12(Ⅷ図版)、17(X図版)の2個あり、『何かを求めて頂上に向かう』(12)、『海の中で漂っている』(17)に示されるように、ぼんやりとした自己イメージが投影されているように感じられる。

5) 対人知覚

$a:p=2:7$ で、被験者は、対人関係で受身的な役割を取りやすいと考えられる。 $H+(H)+Hd+(Hd)=4$ で、他者に対する関心は、平均的にあると考えられる。ただし、孤立指標は、0.44と高く、社会的に孤立している。人間反応は、反応番号1(Ⅰ図版)、3(Ⅱ図版)、6(Ⅲ図版)、11(Ⅶ図版)であり、全て、ペア反応で受動的な反応で、最初の2つが(H)、後の2つが純粹Hであった。反応番号3を除いて、『心が通じ合う』関係の二人で、3と6は、『呪術的』な作業をしている。 $GHR:PHR=4:0$ と、被験者の他者イメージは良好であると考えられるが、非現実的な、漠然としたものであると思われる。

6) 情報処理過程

$L=0.20$ とかなり低く、被験者が通常よりも刺激に巻き込まれていることを示している。すなわち、『①過度の欲求や葛藤で精神状態が混乱し、刺激を客観的・適切に処理できず、②個人的・主観的すぎる態度で現実を歪めて認知し、③情緒の安定性を欠き、④日常生活で形式を無視した行動を取りやすい』(高橋他, 1998)状態である。

$Zf=9$ 、 $W:D:Dd=10:4:4$ 、 $W:M=10:4$ で、 Zf がやや低く、 $W:D:Dd$ におけるDdの割合が大きいことが特徴である。このことは、被験者があまり複雑でなく容易に管理しやすい刺激野の処理を好む傾向を示す。また、 $DQ+=5$ 、 $DQv=8$ で、 DQv が非常に多く、対象を漠然と知覚している。一方、 $Zd=+4.0$ で、オーバーインコーポレイティブ(刺激摂取過剰)ス

タイトルであり、その結果、刺激に巻き込まれやすくなっていると考えられるが、状況関連ストレスの結果である可能性もある。いずれにせよ、被験者は、情報処理過程で、問題を持っていることが明らかである。

7) 認知的媒介過程

Pは、反応番号6(Ⅲ図版)、11(Ⅶ図版)、12(Ⅷ図版)の3個のみで、平均よりもかなり低い。また、X+%は50%と低く、被験者は、非慣習的行動を取りやすいと仮定できる。無形態反応は、4個あり、感情の調節の失敗が、被験者の媒介過程活動を干渉している可能性がある。ただし、X+%を再計算しても、64%で、変わらず低く、被験者の非慣習的行動は、感情調節の失敗のみによると考えることは困難であろう。Xu%は6%で、FA%は56%となるので、被験者が非常に個性的であると言う証拠はない。さらに、X-%は22%で、知覚面での不正確さや媒介過程の歪曲を促進させる重大な問題がある可能性がある。

マイナス反応は、反応番号7(Ⅳ図版)、10(Ⅵ図版)、15(Ⅸ図版)、18(X図版)の4個であり、それぞれの反応内容は、『得たいの知れないもの』(7)、『亀の頭』(10)、『海草』(15)、『人の心』(18)で、それほどひどい歪曲ではない。

8) 思考

体験型は、外向型であり、被験者の思考のほとんどは、感情の影響を受けていると考えられる。Lも低く、周辺の思考活動水準が状況的ストレスによって増大していることもあり、集中的な思考は干渉を受けやすいと予想される。 $a:p=2:7$ で、被験者の思考面の構えや価値観は非常に固定的であり、非柔軟的である。また、 $Ma:Mp=0:4$ で、現実否認するために、空想を過剰に乱用することが示されている。

特殊スコアは、Raw Sum6=9、Wgtd Sum6=21で、SCZIのRaw Sum of 6 Spec.Scores >6 or Weighted Sum of 6 Sp.Sc. >17のいずれにも該当している。被験者の思考の障害は、重篤である可能性が高い。特殊スコアのついた反応は、反応番号2(I図版)、6(Ⅲ図版)、7(Ⅳ図版)、9、10(Ⅵ図版)、12(Ⅷ図版)、16(Ⅸ図版)、17(X図版)の8個で、DV=2、INC=2、DR=5であり、特にDRの多さが目に付く。DRは、『何に見えるか』というテスト本来の課題から外れていく反応であり、被験者は、図版に対する反応に刺激されて、連想を話してしまっている。

M反応は、4個あり、反応番号1(I図版)、3(Ⅱ図版)、6(Ⅲ図版)、11(Ⅶ図版)で、形態水準は全て0で、問題はない。すなわち、思考を必要とする反応であるM反応に問題は見当たらない一方で、特殊スコアの高さに示されるように、思考障害の可能性が存在するという矛盾した結果が、本事例の特徴である。

9) 総合的所見

被験者は、刺激に巻き込まれ、感情的に混乱している。社会的に孤立し、現実を否認するために空想を過剰に乱用するが、SCZIが陰性であることに示されるように、この空想はそれほど歪曲してはいない。しかしながら、認知的側面では、情報処理過程、認知的媒介過程、思考のそれぞれに問題が見うけられ、被験者の分裂病であるという疑いを否定できない。

7. 第1回目と第2回目のロールシャッハ・テスト結果の比較・検討

第1回目と第2回目のテスト結果を比較すると、鍵変数は、 $D < Adj D$ 、体験型外向型、 $p > a + 1$ に該当し、変化はなかった。ただし、 $D = +2$ から $D = 0$ へ、 $Adj D = +3$ から $Adj D = +2$ へと数値が低くなり、 $EBPer = 6.0$ から $EBPer = 2.9$ へと体験型の固定度も低くなっていた。

1) 統制力とストレス耐性

被験者の統制力とストレス耐性に変化はない。 $Adj D$ は、共にプラスであり、被験者の成長・変化への動機付けが低いことが示されているが、2回目では、被験者の経験しているストレスが増大し、 $D = 0$ へと変化した。これは、状況ストレスの大きさによる変化ではあるが、自分の状態に全く気付かなかった状態からの脱出とも考えられ、現実適応と言う面では、望ましい変化であると思われる。体験型は、2回とも外向型で変化せず、 L は、0.60から0.20へと変化した。

2) 状況関連ストレス

D と $Adj D$ の差は、1から2へと変化した。2回目の方がストレスにより生じている妨害は深刻であると考えられる。色彩濃淡ブレンドの数も、1個から5個に増加し、感情的にひどく混乱している。2回目のテストは、6回目入院後、約1ヶ月経過した時点で実施しており、被験者の精神的状態が比較的落ち着いた段階でのものである。したがって、被験者の感情的混乱は、入院中という状況に関連したストレスと考えられ、おそらく、被験者は無力感や将来への不安を感じているのではないかと想像される。

3) 感情の特徴

1回目のテストでは、 $DEPI = 5$ で、被験者の人格構造に激しい抑うつや感情的崩壊を経験する傾向があることが示されたが、2回目では $DEPI = 3$ へと変化した。これは、 $3r + (2) / R = 0.29$ から0.39へ、 $MOR = 3$ から0へ変化したためである。体験型は、外向型で変化なかったが、

EBPer=6.0から2.9へ減少している。つまり、感情を思考に混入させる傾向は、2回目の結果でも通常よりも大きいですが、1回目のときほど極端ではなくなっている。

eb=4:3から5:8へ変化し、2回目では、被験者は何らかの苦痛を感じている。この苦痛の体験は、Y=5によるものであり、入院中という同じ状況にありながら、その受け止め方の違いを反映しているのかもしれない。Afr=1.0から0.64に減少し、被験者が以前ほど感情刺激に過剰に反応しなくなっていることが示唆される。2回目のラムダが、L=0.20と、かなり低い値になっていることを考慮すれば、被験者は刺激に巻き込まれている状態に少しは気付いており、感情刺激の取り入れを調整しているとも考えられる。ただし、FC:CF+Cは、相変わらず、CF+C優位であり、純粹C反応の数も、1回目で3個、2回目で4個とほとんど変化なく、被験者の感情調節には、重大な問題が残っている。さらに、被験者の心理的複雑さは、2回目で増大しており、感情的にさらに混乱している状態である。

4) 自己知覚

自己中心性指標は、0.29から0.39に変化し、通常の人々と同じ程度の自己への関心が出てきたと考えられる。相変わらず、FD、V反応はなく、自分について内省することは少ないと思われるが、否定的な自己イメージはなくなっている。ただし、2回目では、Hx=3が新たに出現し、被験者の自己イメージや自尊心は、現実の体験に基づくと言うよりも、むしろ現実を無視した知性化によって取り扱われるために、ひどく歪曲された特徴を持つと仮定される。

5) 対人知覚

1回目と2回目で、対人関係で受身的な役割を取りやすい傾向に、変化は見られなかった。他者に対する関心の程度も変化していないが、孤立指標は、0.13から0.44へと上昇し、社会的なネットワークからはずれてしまっている。その一方で、GHR:PHR=2:2から、4:0へ変化し、他者に対するイメージは、非常に良いものとなっている。ただし、2回目の被験者の他者イメージは、『心が通じ合う』という、目に見えない、漠然とした相互作用を想定しており、社会的に孤立しているために、非現実的な他者イメージしか抱くことができないのかもしれない。

6) 情報処理過程

ラムダは、L=0.60から0.20へ低下し、被験者は刺激に巻き込まれている。Zfの数はほとんど変化していないが、Zdの値が-6.5から+4.0へ増加し、アンダーインコーポレーティブスタイルからオーバーインコーポレーティブスタイルへと変化した。これは、W:D:Dd=11:10:3から、10:4:4への変化にも表れているように、被験者の情報処理努力の変化を示唆してい

と考えられる。その一方で、 $DQv=8$ と変化なく、被験者は、相変わらず、対象を漠然と知覚している。

7) 認知的媒介過程

Pの数は平均よりかなり少なく、2回目でⅧ図版で1個増えたのみであった。Xu%は、29%から6%へ減少し、2回目のテスト結果からは、被験者の非慣習的行動が、個性を強く強調していることの表れであると言いがたく、被験者の病理水準の重さを裏付けていると考えられる。ただし、マイナス反応の歪曲の程度は、2回目のテストでも、それほどひどくはない点は、特徴的である。

8) 思考

体験型は、外向型であり、固定度は減少しているものの、超外向型であることは変わらない。Ma:Mp=1:1から0:4に変化し、2回目では、現実を否認するために、空想を過剰に乱用する傾向が見られる。1回目に見られたMOR=3が、2回目のテストで全くなくなっていることも、現実否認の表れのひとつかもしれない。こうしたことは、現実的に繰り返される入院や、現実適応上の様々な困難の体験によるかどうか、テスト結果からだけでは計り知れないが、このような人には、日常的な小さな成功の積み重ねが、必要であるように感じられる。特殊スコアは、SCZIで2回とも引っかかっており、被験者の思考障害の存在を示唆するものである。

9) 病理水準

1回目では、SCZI=2、DEPI=5で、認知的な問題よりも、むしろ感情の問題が前面に出ていた。否定的な自己イメージや悲観的な思考を特徴としているが、被験者は、ストレスとして感知せず、全く統制に問題を感じていない。これは、被験者の資質の高さもあるが、自分の内的な欲求を感知しにくいことが、多に関係しているように思われる。自分についての気付きが少ないということは、2回目でも見られた特徴であるが、被験者の現実吟味能力の低さの一面を表しているのかもしれない。

2回目では、SCZI=3、DEPI=3へと変化しているが、被験者の感情の問題はより深刻になっていると考えられる。すなわち、被験者は刺激に巻き込まれ、感情的混乱を体験し、苦痛を感じていると仮定される。統制やストレス耐性は1回目よりも低下したが、それでもなお、被験者自身は問題を感じていないようである。空想への逃避傾向の増大や、孤立性指標の上昇にもかかわらず、被験者の人間運動反応が良好な水準を保っていることは、非常に特徴的である。

体験型が外向型であるために、感情の問題は思考に大きな影響を及ぼすと考えられるが、被

験者の場合、感情の問題を除外しても、思考の障害の存在を否定できないだろう。また、このことは、思考の障害の程度が軽度であっても、感情の問題によって、病理が重くなるということである。被験者のプロフィールからは、診断的には、分裂病で妥当であろうが、テストに示されたように、本人の資質の高さや、それほど低くはない現実吟味能力により、本人も、周りの人も、病理を実際よりも軽くとらえ、そのために、結局は破綻してしまう現実適応を期待してしまうのかもしれない。

8. おわりに

分裂病指標 (SCZI) は、思考の障害の程度を示唆する指標であり、被験者の病理水準に関しては、指標のみでなく、ロールシャッハ・テスト結果に関する総合的な解釈が必要である。被験者の場合、体験型が外向型であり、感情の問題が非常に重要な鍵となった。このことは、病理水準の検討に、体験型を考慮する必要性を示唆していると考えられ、今後の研究課題である。

9. 文献

- 1) Exner, Jr., J. E.: The Rorschach: A Comprehensive System. Vol. 1: Basic Foundations, Rorschach Workshops. (1986) (高橋雅春他訳, 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上), 金剛出版, 1991)
- 2) Exner, Jr., J. E.: The Rorschach: A Comprehensive System. Vol. 1: Basic Foundations, Rorschach Workshops. (1986) (秋谷たつ子他訳, 現代ロールシャッハ・テスト体系 (下), 金剛出版, 1991)
- 3) Exner, Jr., J. E.: A Rorschach Work-book for the Comprehensive System, Rorschach Workshops. (1990) (小川俊樹他訳, ロールシャッハ・テストワークブック, 金剛出版, 1992)
- 4) Exner, Jr., J. E.: The Rorschach: A Comprehensive System. Vol. 2: Interpretation, Rorschach Workshops. (1991) (藤岡淳子他訳, エクスナー法ロールシャッハ解釈の基礎, 岩崎学術出版社, 1994)
- 5) Exner, Jr., J. E.: The Rorschach: A Comprehensive System. Vol. 1: Basic Foundations. (3rd ed.) New York: Wiley. (1993)
- 6) 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 包括システムによるロールシャッハ解釈入門, 金剛出版, 1998